

定置漁業における“DX”

DX（デジタルトランスフォーメーション）とは、D（デジタル）とX（トランスフォーメーション：変革）を組み合わせた言葉で、デジタル技術の活用による新商品の提供や新たなビジネスモデルの開発を通じた社会生活等の「変革」を意味します。したがって、魚市場における仕切り伝票（魚種、数量、単価など）を紙への手書きからタブレット入力に変えただけではDXとは言わず、タブレット入力に変えた上で、さらにそのデジタルデータを漁業者や仲買、飲食店と共有し、例えば漁業者が水揚港の選択、仲買が魚の仕入れや出荷の判断、飲食店がメニュー検討などに利用できるようになることがDXと言えます。

伊豆地域の漁業におけるDXに類する取組事例としては、定置網の「ユビキタス魚探」が挙げられます。ユビキタス魚探は、いつでもどこでもiPad等のタブレット端末で定置網内の魚の入網状況がわかるシステムであり、その情報を元に、出漁の判断をしたり、出漁前に積載する氷の量を調節したりといったことが可能になるため、漁業者の作業負担減少や、コスト削減による収益向上に繋がっています。

また、DXは単独で取り組むよりも、複数の団体に連携して取り組んだ方が、メリットが大きいと考えます。例えば、上述のユビキタス魚探については、魚探データを魚市場等と共有すれば、水揚量の予測が立てられるため、水揚作業の効率化や、仲買人への情報提供による買付量の増加なども期待できます。さらに、伊豆東岸の各定置網で海況データを収集、共有するシステムが構築できれば、伊豆地域沿岸の海況を網羅的に把握、共有することが可能になり、海況変化をリアルタイムに察知して漁具被害を未然に防ぐことなどが期待できます。また、DXのデメリットとして導入・維持コスト高いこと、波浪等による損傷・流失が挙げられますが、導入する機器を必要最低限の機器に限定したり、隣接する定置網と役割分担して、一方が水温計を、一方が潮流計を設置して、お互いに海況データを共有できるような仕組みにすれば、1つの網で2種類の観測機器を設置するよりも経費を抑えることができます。

このように、DXは複数の漁場で一緒に取り組んだり、他漁業や魚市場等の他団体も巻き込んだりすることで、デメリットを抑え、メリットを増やせると考えられます。DXと聞くとハードルが高いイメージがあるかもしれませんが、興味がある漁場、既に魚探等を試験導入している漁場は、他の漁場や漁協等と一緒にDXに取り組んでみてはいかがでしょうか。

（鈴木勇己）